

## 『クリスチャンの夫として①』

'23/03/12



聖書箇所: エペソ人への手紙 5章 25節 (新約 p.380)

以前にも、同じような統計を紹介したことがあるのですが…、日本の厚生労働省が発表している、2021年の婚姻(=結婚)数は約50万件だったそうです。その逆に、離婚の数は?と言うと、約18万件にも上るそうです。単純に数だけで見ると、実に、3分の1“以上”の夫婦が離婚している計算になります。もちろん、最近は、少子化であるとか…、熟年離婚などといったことがありますので、単純に、結婚した人たちの3分の1が離婚しているとは言えません。しかし、毎年毎年、結婚しているカップル数の、実に、3分の1以上ものカップルが、離婚という結論を下しているのです。

そうして、それに伴って、多くの…、悲しい家族の話や、可哀想な子どもたちの話を、私たちはよく耳にします。そういったことについては、敢えて、今ここで話さなくても、皆さんは、もう十分にご存知です。

### 命題: クリスチャンの夫は、どのように自分の妻を愛すべき?

改めて言うまでもなく、家庭の中心は夫婦です。夫婦があって、初めて、そこに子どもが与えられ…、家族が大きくなっていき、成長していくからです…。しかし、その肝心の夫婦が、自分の勝手な価値観を相手に押し付けて…、自分の我を通していただけでは、夫婦の間に亀裂が入ってしまったり…、家庭内で溝ができたりしてしまうのは、ある意味、当然のことではないでしょうか?

私たちが願うことは、家庭が神様によって祝福されていくことであるはずですが、しかし、そのために必要なことは…、まずは、家庭の中心である夫婦が祝福されていくことです。そして、それよりも前に必要なことは、まず、夫婦の内の妻が…、そして、夫が祝福されていく必要があるのではないのでしょうか?

しかし、実際のところ…、私たちクリスチャンの多くが勘違いしてしまっているのは、夫婦や家庭の問題に限らず…、どんな問題や状況であっても…、「とにかく、神様を信じてさえいれば良いんだ…。救われてさえいれば、あとは神様が家庭や周りの環境をも、自然と良いように導いてくださるんだ。」というような間違った理解です。だから、多くのクリスチャンたちは、みことばに従っていくということをおろそかにしてしまって…、周りのことも考えずに、自分の我を押し通そうとしてしまったりするのではないのでしょうか…。

大変申し訳ありませんが…、聖書は、そのようには教えていないと、私は考えています。…と言いますのは、皆さんもよくご存知の、Ⅱテモテ 3:12 には、こういことが教えられているからです。『確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。』って…。神様の前に正しく生きようとした時に、迫害…、つまり、何らかの問題が必ず起こるのだという警告があります。

また、イエス様も、このようにおっしゃられました…。マタイ 10:34-38、[34] わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。35 なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。36 さらに、家族の者がその人の敵となります。37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。』⇒このみことばは、前回のメッセージの時にも引用しましたが、ここで、イエス様は、究極の状況と言うか…、簡単に起こり得ないような状況について話してくださっています…。しかし、例え、そうであっても、私たちがしっかりと覚えておかなければいけないことは…、私たちが神様を第一とすることによって、逆に、家庭の中で問題が起こったり…、家庭そのものが分裂してしまったりすることだって有り得る、ということだったはず…。

「神様を信じたら…、クリスチャンになりさえすれば…、あるいは、教会に来てさえいれば、万事うまくいく…」とは、決して聖書は教えていません。そうではなく…、むしろ、私たちは真の神様を信じたから…、神様によって救われたからこそ…、あるいは、神様によって変えられたからこそ…、神様を愛して、みことばに従っていくのです!

ちよっと、皆さん。ヘブル 12:4-10 をご覧くださいませ。『4 あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れてはなりません。『わが子よ、主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。』7 訓練と思つて耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であつて、ほんとうの子ではないのです。9 さらにまた、私たちに肉の父がいて、私たちに懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬つたのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。10 なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思つたままに私たちに懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。』

⇒皆さん、お聞きになってくださいませ? このみことばは、神からの懲らしめに関する教えですが、ここで、みことばがはっきりと教えてくれていることは、神様は、救われた者のことを愛するが故に、『むちを加えられる』のです! …でも、最後の 10 節に何とありました? 何のために、神は私たちに懲らしめられるのでしょうか? …『私たちの益のため…』でしょ! 実は、神様の与えてくださる懲らしめも…、私たちが受ける迫害や苦しみも皆…、私たちを霊的に成長させるのです。神様の願いは、私たちを霊的に成長させてくださって…、私たちを、より聖い者へ…、よりキリストに似た者へと成長させていくことにあるのです!

ですから…、私たちがクリスチャンの夫の在り方であるとか、妻であるとか…、クリスチャンとしての実践というように学ぶにあたって、覚えておくべきことは、もしも…、私たちがみことばをおろそかにしてしまつて…、神様の御教えに対して、熱心に耳を傾けようとしないで、いい加減に生きていこうとするなら…、そこには本当の、神様からの祝福はありません…。私たちが、神様からの祝福を受けられるか否かは、私たちの、みことばに対する態度にかかっているのです…。そのことを、私たちは、今一度、ここ数回のメッセージを通して、もう1度、確認していきたいと思つます。

私たちは、これまで3回に渡つて、クリスチャンの妻が、その家庭にあって、どのように生きていくべきか…、どのようにして自分の夫に従っていくべきなのか? ということなどを学んで参りました…。そして、今日から2回…、今日と来週とで、クリスチャンの夫たる者は、どのようにして自分の妻を愛していくのか、ということをお勉強していきたいと思つます…。少し前置きが長くなりましたが、どうぞ、今回の聖書箇所であるエペソ 5:25-33 をお聞きください。

<エペソ 5:25-33>

- 25 夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。
- 26 キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、
- 27 ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。
- 28 そのように、夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。

29 だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえって、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。

30 私たちはキリストのからだの部分だからです。

31 「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる。」

32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会とをさして言っているのです。

33 それはそうとして、あなたがたも、おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。妻もまた自分の夫を敬いなさい。

## I・妻を、神の愛でもって愛する！(25節)

今日のところは、今、読んだ 25 節だけを見ていきます。まず、今、読んだみことばをご覧くださいと、幾つかの重要な要素がありました…、しかし、ここで夫に対して言われている教えは、「自分の妻を愛しなさい！」ということに要約することができます。実際、このみことばを注意深く観察していただきますと、この個所で出てくる命令形は、25 節の、『あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。』という部分と、33 節の、『おのおの自分の妻を自分と同様に愛しなさい。』ということだけであることが分かります…。

しかし、いつも言うことですが、「愛」という言葉ほど、聖書の教える内容と、世間一般の人たちが持っているイメージと違っているものも、そう多くないと思います。ここで言われている命令は、クリスチャンの夫が、世間一般の言う愛ではなく…、聖書が教える“神の愛”でもって、自分の妻を愛する！ということが命じられているのです…。

じゃあ、具体的に、どのようにして、クリスチャンの夫は、その妻を愛すべきなのでしょう？そのことを、まず初めに見ていきたいと思えます。ここ 25 節には、『夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。』とあって、33 節までの教えの概要と言うか…、中心的な内容が書かれてあります。

ここで、まず、初めに注目したいのは、『あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。』とあって、その模範として、イエス様のことが挙げられてあることです。ここに、『キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように…』とあるように、クリスチャンの夫の模範は、当然、イエス様です。

このことは、妻に関する教えの中でもお話ししたことです。それが妻であろうと…、あるいは、夫であろうと関係ありません…。その人がクリスチャンである限り、その人の最高の模範はあのイエス・キリストであり…、1 番の優先順位は、イエス様であるはずなのです！…皆さんだって、そうでしょ？

どうぞ、少し前の 22 節をご覧くださいと、『妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。』とあって…、まず、「主に従う」ということが前提条件になっていることが分かります。それと同じように…、ここ 25 節でも、イエス様に従うということが前提となっているでしょ？

### ●神の愛の 特徴 とは？

じゃあ、ここで模範として挙げられている、イエス様は、どのように教会を愛して下さったのでしょうか？…まずは、神様の愛が持っている“特徴”について、今日は見ていきたいと思えます。いつも言われることですが、今日のみことばで使われてある、『愛』を表わす言葉は動詞形も、名詞形もすべて、神の愛を表わす、アガペーの愛という言葉(の変化形)が使われてある、ということ、まずは、覚えておいてください。

### ①自己犠牲的

このみことばは教えます、「イエス様は教会を愛された故に、ご自身のことを捧げて下さった！」って…。

つまり、聖書が教えてくれている神様の愛とは、自己“犠牲”的な愛です。それに対して…、世間一般が言うような愛は、どちらかと言うと、相手に何かを期待するような愛です。つまり…、「私がいだけ愛しているのだから、自分も愛されたい…」とか、「自分のことを優先してほしい、大事にしてほしい…」といったような具合です。

でも、聖書のみことばはそうは教えません。だから、例えば、ヨハネ 3:16 のみことばは、こう教えますでしょ？『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。』って…。このように、神様の愛とは、「捧げるような愛」であって、要求するような愛とは正反対の傾向があります。

皆さん、今、ここで凄いことが教えられていたことに気付いてくださいますか？…実は、ここで言われている、『世』(κόσμος)とは、本来、この世界、この宇宙に存在するすべての者…、すべての人間たちのことを指しています。神様は、この世に存在するすべての人間を…、ここにおられるすべての人間たちを愛して下さっているのです！しかも、それは、何物にも代えがたい…、自分のひとり子の命さえも惜しみなく捧げるほどの、大きな…、大きな愛でもって愛して下さった、と言うのです！

また、いつも言いますように、愛には、必ず何らかの犠牲を伴います。そして、ある意味、その愛の大きさは、その引き換えにする犠牲の大きさでもって、量ることができます。神様の愛は、ご自分のひとり子さえ惜みずと与えて下さるほどの“大きな愛”であったのです。

時々、ここ日本では、神様が、そのひとり子であるイエス様のいのちをも犠牲にして、私たちに救いの道を備えて下さったから、「あなたには、それだけの価値があるのです！」というようなメッセージをされることありますが、私はそうは思いません！イエス様が犠牲にしてくださったいのち、私たちの価値を表わしているのではなく、神様の愛の大きさを物語っているのです！…だから、例えば、ヨハネ 15:13 のみことばだって、『人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。』と教えられてありますでしょ？…私たちに価値があったから、私たちが救われたのではありません！神様の愛がとてつもなく大きかったから、私たちは救われたのです…。

天の神様は、私たちに、神様の愛の大きさを分かりやすく伝えるために、『そのひとり子をお与えになったほどに…』という例えを使って、教えてくださいました。恐らく、親にとつて、たった一人しかいない子どもの存在は、自分の命以上の存在でしょう…。神様とは、まさしく、そのような…、大きな愛でもって、私やあなたを愛して下さったのです！

その神様が、救われた私や皆さんに願っておられることは、例え、皆さんが夫であろうと…、妻であろうと…、あるいは、子どもの立場であろうと、社長であろうと、奴隷であろうと、あのキリストを模範として…、キリストに倣って、生きていかれることです。…ね！ですから、例えば、ヨハネ 13:15 のみことばなどで、イエス様は、こんなことを教えて下さったわけですよ。『わたしがあなたがたに示したとおりに、あなたがたもするよに、わたしはあなたがたに模範を示したのです。』…この時、イエス様の一行は、「最後の晩餐」を迎えておりました。…その直前、弟子たちの中には、「誰が、この中で一番偉いか？」なんていう、不毛な議論がなされていきました。この当時、「他人の足を洗う」なんていうことは、本当なら、卑しい…、汚らしい行為であって、普通なら、誰もがやりたがらないような行為でした。そんなことを、神であるイエス様が実践して下さったのです！…イエス様は、「誰が一番偉いか？」なんて言う、弟子たちに対して、「あなたたちは、このように、へりくだりなさい！相手に仕える者となりなさい！」というようなことを、身をもって教えて下さったのです。このように、イエス様は、御自分で実践して下さって、それを弟子たちにも「やりなさい」と言って、教えて下さったのです…。

また、1ペテロ 2:21 でも、同じようなことが教えられてあります。『あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残さ

れました。』とあります。このように、キリストが歩まれたように私たちも歩み…、キリストが御話しになられたように私たちも話し…、キリストが赦されたように私たちも赦していくことです。そうして、もちろん、キリストが愛されたように、私たちも人を愛していくことです。それが、神様の愛でもって、人を愛していくということなのではないでしょうか？

## ② 無条件の愛

神の愛でもって、人を愛していくということは、そのように、自分を犠牲にして愛していくことだけではありません。神様の愛とは、そこに一切の条件を設けないことなのです。先程紹介した、ヨハネ 3:16 には、『世を愛された…』とありました。その『世』とは、すべてのものを指すのです。神様の側には、そこに一切の条件も無いのです…。

例えば、旧約聖書だけを見ると、神は、イスラエルの者たちだけを愛されたように映るかも知れませんが…、決してそうではありません。ちょっと、皆さん。創世記 12 章のみことばをご覧くださいませ？ 神様が、1 番最初に、アブラハムに声をかけられた、あのシーンです。創世記 12:1-3、『1 【主】はアブラムに仰せられた。『あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。 2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。 3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』』⇒皆さん、1 番最後の部分を聞いてくださいました？ 神様は、アブラハムに対して、こうおっしゃったのです、『地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。』って…。

確かに、神様は、アブラハムとその子孫を選ばれ…、特別な導きを御与えになられました。しかし、それは、アブラハムの子孫である、イスラエルの民たち“だけ”を愛されたからではありません。神様は、すべての民たちを愛され…、そのために、まずは、特別に、アブラハムとその子孫たちに目を向けられたのです！

どうぞ、今度は、詩篇 96:1-8 をご覧ください。『1 新しい歌を【主】に歌え。全地よ。【主】に歌え。 2 【主】に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと、御救いの良い知らせを告げよ。 3 主の栄光を国々の中で語り告げよ。その奇しいわざを、すべての国々の民の中で。 4 まことに【主】は大いなる方、大いに賛美されるべき方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。 5 まことに、国々の民の神々はみな、むなし。しかし【主】は天をお造りになった。 6 尊厳と威光は御前にあり、力と栄光は主の聖所にある。 7 国々の民の諸族よ。【主】にささげよ。栄光と力を【主】にささげよ。 8 御名の栄光を【主】にささげよ。ささげ物を携えて、主の大庭に入れ。』

⇒このように、すべてを造られた真の造り主なる神様は、すべての民が救われることを願っておられます。

I テモテ 2:4 のみことばが、『神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。』と教えてくれている通りです！…でも、その神様が、この世に、その神様を証する(≒伝道する)ために用いられた方法は、先に、その神様を知って、先に救われた者を用いてくださる、という方法でした…。神様は、そのために…、旧約の時代にあつては、イスラエルの民を選び…、そして、今の時代にあつては、クリスチャンである私や皆さんを選ばれたのです！

だから…、私たちも、神様の愛でもって人を愛するのに、そこに何の条件を付けるべきではありません。何故なら、神様は、すべての者たちが救われることを願っておられるからです。イエス様は、マタイ 5:46 で、このように教えてくださいました…。『自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。』って…。神様が、救われた私や皆さんに期待しておられるのは、皆さんの愛に…、その愛すべき対象に、何の条件も付けないことなのではないでしょうか？

例えば、皆さんは、自分の奥さんや、自分の愛すべき対象に何らかの条件を付けていらっしゃる？…「私が自分の妻を愛せないのは、妻がこうだからだ！」とか…、「私が、この人を愛せないのは、この人のせいだ！」とか…、「もしも、この人がこうだったら、愛してあげよう」なんて…。もし、私たちが、人を愛するのに、そういったような…、何らかの条件を付けているのなら、それを「神の愛だ」と言い得るでしょうか？…果たして、そういったようなことは、私たちを救ってくださった神様が喜んでくださるような愛でしょうか？…どうか、今一度、考えてみてください…。何故なら、私たちがもう既に学んできたように…、神様の愛とは、愛されるべき価値のない私たちを愛し…、私たちを罪の罰から救うために、自分から進んで、十字架にかかってくださったような…、そのひとり子であられるイエス様のいのちさえ犠牲にしてくださるような、最高の愛だったからです…。

## ③ 感情ではなく、意志による！

聖書のみことばは教えます、「あなたも神にならって、そのような神の愛でもって、人を愛していきなさい」って…。正直言って、皆さん…、そんなことができると思います？…例えば、イエス様は、ルカ 6:27-28 で、弟子たちに対して、こう教えてくださいました。『27 しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。 28 あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。』と続いています。

でも、皆さん！ 敵を愛するなんて、できます？…この当時で言う「敵」とは、実際の武力でもって向かってくる者たちですよ！…そんな敵たちを、愛するなんて、果たして、可能なのでしょうか？⇒正直言って、自分に対して武器を持って向かってくるような敵を愛するとか、あるいは、自分の家族や友人を殺したような相手をするなんて、絶対に不可能です！…もしも、そのような者たちのことを、感情的な愛でもって愛そうとするなら…。そうでしょ！

でも、もしも、私たちが、神様の愛を知って、そのような神様の愛でもって…、しかも、感情ではなく、私たちの意志…、あるいは、私たちの選択でもって、敵をも愛していこうとすると…、ま、それだって、決して、簡単ではありませんが、でも、それは決して不可能ではないのです！

もちろん、私たちが、自分たちのことを攻撃してくるような敵を愛するなんて、普通なら、当然、そんなことはできません…。しかし、実は、天の神様が、そのようにさせてくださるのです！でも…、幾ら、神様がそのようにして下さるからと言っても、私たちが救われただけで…、何もしないでいては、そのようなことになりません。実は、そこには“ある秘訣”があるのです！そういったことを、私たちは、来週の礼拝で学んでいきたいと思っています…。

とりえず、現時点で、皆さんに、しっかりと理解していただきたいことは、神様の愛とは、感情ではなく、私たちの“意志”であり…、“選択”である！ということです。ちなみに、この世間一般が教えるような愛とは、むしろ逆で、感情的なものです。その愛は、あまりにも感情的過ぎて…、自分の意志ではコントロールできないようなものではないでしょうか？

しかし、聖書のみことばは、そうは教えません。だから、聖書には何か所かで、愛に関する“命令”が書かれてあるのです。もしも…、神の愛が感情的なものであったら…、そういったようなことを命じることはできません。…と言いますのは、感情とは、私たちの意志で、簡単に操作できるようなものではないからです。皆さんだって、そうでしょ？

しかし、「神の愛」というものが、その人の意志であり…、そこに選択があるが故に…、私たちに、神の愛でもって、人を愛し…、善を施していくことが決して不可能なことではないのです。…「不可能ではない」ということは、実は、私たちも、何らかの責任を問われるのです…。

今日のみことばの、25 節では、実は、3つの動詞が使われています。『夫たちよ、キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。』⇒実は、これらの動詞ですが、キリストが教会を愛されたということ…、教会のためにご自身を捧げられたという部分には、アオリスト…、別名、「不定過去」と呼ばれるような時制が使われてあります。…と言いますのも、これらは、過去のある時点でなされたことだから、です。イエス様が、そのような実践を示してくださり、イエス様が模範を示してくださった、ということです。しかし、最後の、『自分の妻を愛しなさい！』という命令形の部分には、現在命令法という文法が使われてあります。それは、つまり…、「自分の奥さん愛することを日々、日常的に…、継続的に行なっていきなさい！」ということなのです。

<励ましの言葉>

さもすると、私たちは「人を愛する」というようなことを、1日、2日なら実践できるかも知れません。しかし、神様のみこころは、私たちが日常的に…、しかも、終わることなく、人を…、自分の妻を愛し続けていくことなのです。それこそが、私たちの証しであり…、神様が望んでおられることなのです。

先程も言いましたように、私たちが神様の助けをいただきつつ…、そういったことをなしていく時に、神様が皆さんのことを祝福してくださり…、そして、そこに主の栄光が現わされていくのです。…ですから、どうぞ、今後のメッセージも、「自分は男性ではないから」とか…、「自分は独身だから」といったことではなく…、神様の前に喜ばれる態度でもって、希望をもって、まずは、神様のみことばに耳を傾けていってください。心からお勧めいたします。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。